

「地域ゆかりの楽曲」を
若年層に広めるためには

明治大学経営学部公共経営学科

学生番号：1740190515

4年7組4番 伊藤 健士郎

目次

まえがき	2
第1章　はじめに	3
1-1. 問題の所在	3
1-2. 「地域ゆかりの楽曲」とは	4
1-3. 「地域ゆかりの楽曲」の現状	4
第2章　若者に浸透しない本当の理由	7
2-1. 作曲家の記念館の事例	7
2-2. 若者は本当に「地域ゆかりの楽曲」を知らないのか	9
第3章　学校教育や現代風アレンジが果たす役割	11
3-1. 学校教育が果たす役割	11
3-2. 学校教育における課題	15
3-3. 現代風にアレンジされた民謡	20
3-4. オリジナルの楽曲か、あるいはアレンジした楽曲か	21
第4章　考察	24
4-1. トモエ学園の事例から学ぶ、「強制」させない教育	24
4-2. シュタイナー教育から考える	24
4-3. 具体的な施策の提案	26
注	30
参考文献	32
研究協力	34

まえがき

音楽の流行は時代によって変化する。そのため、高年齢層に良く知られる音楽が若年層にとってあまりなじみがない、というケースも少なくない。

筆者が体験したエピソードを一つ紹介する。筆者は学内の「混声合唱団」のサークルに所属している。活動中は演奏会に向けて様々な合唱曲に取り組んでおり、その中で、日本及び外国に古くから伝わる民謡に触れることもある。しかし、これらの楽曲に関する知識について、自分たち学生と練習で常にお世話になっている先生方との間でのギャップを感じる場面がしばしば生じる。

ここで、筆者がサークル活動で体験したエピソードを1つ紹介する。2022年12月の定期演奏会で演奏予定の「ホームソングメドレー」のうち、日本のホームソングのメドレーの合唱合わせをしていたときのことである。このメドレーは『花』『荒城の月』『椰子の実』の3曲で構成されている。練習の際に、常任指揮者の先生がこれらの3曲を知っているか否かについて、挙手制で調査を行ったことがあった。その結果、『椰子の実』を知っていると答えた学生は極めて少数であり、実際に筆者もこの曲はこれまで触れたことがなかった。そのため、民謡やご当地ソングなど、地域に古くから伝わる歌は、若年層にとってはあまりなじみのない楽曲ではないかと感じた。

しかし、自分たち大学生が知らない楽曲が多かったということは、「音楽への関心の範囲を広げる機会となった」という肯定的な捉え方もできる。実際、筆者もサークル活動を通して様々な合唱曲に触れたことで、より様々なジャンルの音楽への知識を深めたいという思いが強まった。例えば、民謡ではないが、近年になって積極的にこれまで見たことのなかった映画を見るようになったのも、サークル活動で映画音楽に触れたことがきっかけである。

こうしたことから、古くから伝わる音楽が若年層にあまりなじみのないものであったとしても、それらの音楽を知る何らかの機会を与えることで、年齢層を問わず広めることはできるのではないかと考えた。

第1章 はじめに

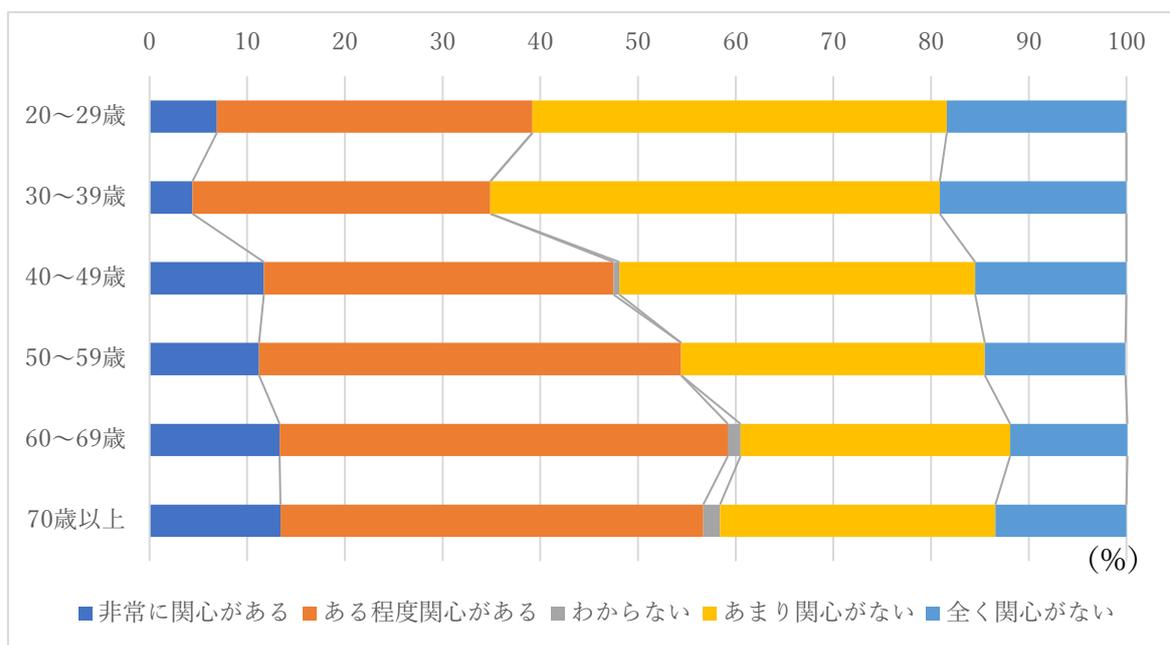
1-1. 問題の所在

この論文では、地域ゆかりの楽曲を若年層に広めることは可能であるのか、可能であるとしたらどのような方法が効果的であるのか、ということについて考察する。

近年のわが国の伝統文化の衰退が指摘されている。その原因の一部として挙げられているのが、ライフスタイルの変化による需要の減少や、高齢化による担い手の不足である¹。

特に、若年層の伝統文化への関心が薄まっている。図表1は、内閣府が調査した伝統芸能への関心に関するデータをもとに、筆者が独自に作成したものである。この図表からも、年齢が若くなるほど、伝統芸能に対する関心が薄くなる傾向にあることが分かる。実際、70歳以上のうち6割近くが「非常に関心がある」「ある程度関心がある」と回答したのに対し、20～29歳では約4割にとどまり、反対に「あまり関心がない」「全く関心がない」という回答が6割以上を占めている。

図表1：年齢別の伝統芸能への関心度



表出典：内閣府「文化に関する世論調査」平成15年11月調査

<https://survey.gov-online.go.jp/h15/h15-bunka/2-5.html> (2022年11月30日アクセス) 図17を元に独自に作成

今回は伝統文化の中でも「地域ゆかりの楽曲」を扱うため、現状に関して、さらに「音楽」に絞ったうえで説明する。アサヒグループホールディングスは独自の調査により、20～40

代がJ-POPに高い関心を持つ一方で、60代以上がクラシック、演歌、民謡、島唄に高い関心を抱いている²ことを証明している。実際にも、よく聞く音楽のジャンルについて「邦楽ポップス（J-POP）」と回答した人は、20～40代の各年代で70～80%いるという。また、「演歌、民謡、島唄」と回答した人に関しても、20～40代が10%未満である一方で、60～70代は50%近くを占めている。すなわち、若年層と高齢層との間で、関心を持つ音楽のジャンルが完全に二分しているのである。

1-2. 「地域ゆかりの楽曲」とは

初めに、この論文で扱う「地域ゆかりの楽曲」に定義づけを行う。ここでの「地域ゆかりの曲」とは、主に以下の2つを意味する。

① 地域に古くから伝わる民謡、ご当地ソング。

沖縄県のエイサーや茨城県の磯節、徳島県の阿波踊りなどが該当する。これらは、その地域の生活文化と根付いたものが多い。海外にもこうした民謡は存在するが、この論文では国内の民謡のみを対象とする。

また「ご当地ソング」とは、タイトルや歌詞に都市名・地方名や各地方の風習・文化・地形に関する事柄などを取り入れることで、地方色や郷愁などを全面的に打ち出した楽曲³を指す。

② 地域が生んだ作詞家や作曲家によって作られ、今も受け継がれている歌。

詳細は第2章で述べるが、各地に地域ゆかりの作詞家・作曲家の記念館があり、そこでは彼らの楽曲を実際に鑑賞する機会が設けられている。また、こちらも次章で後述するが、彼らのゆかりの地域の駅などで楽曲が使用されることもある。例えば、福島県福島市出身の作曲家、古関裕而の楽曲（「古関メロディー」）は福島駅で、定時の知らせ、及び新幹線や在来線の発着のメロディーとして使われている。

1-3. 「地域ゆかりの楽曲」の現状

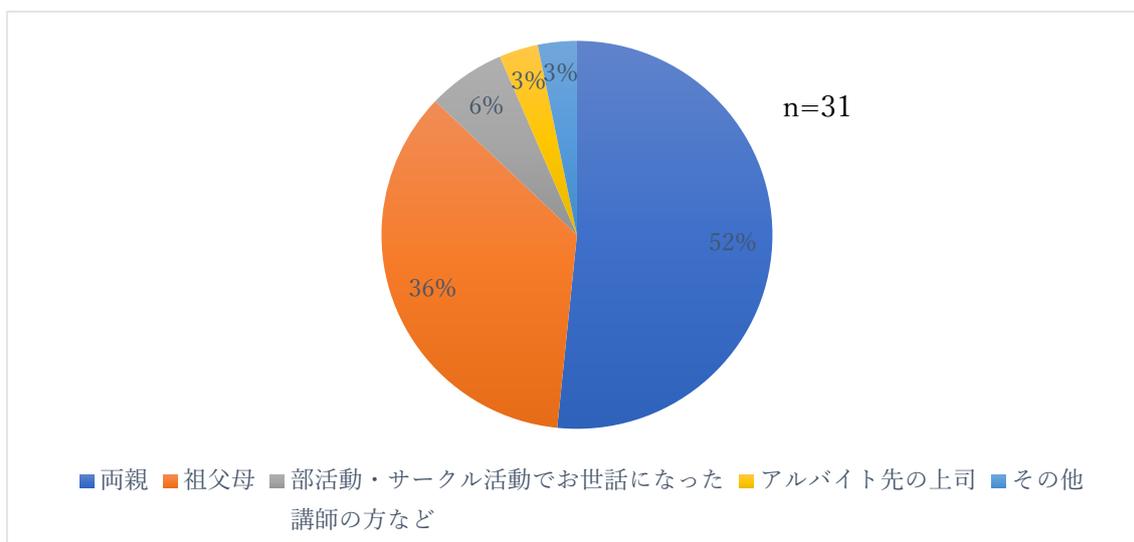
2022年10月末以降、20代31人に関して、こうした「地域ゆかりの楽曲」に関するアンケートをとった（以下、アンケート）。その際、最初に「両親や祖父母など、『身近な大人』にとってなじみのある曲が、自分は全く知らない曲だった、という経験はありますか」という質問をした。その結果、9割近くが「ある」と回答した（図表2）。さらに、身近な大人が具体的にどのような人であるかについて質問したところ、「両親」「祖父母」と回答した人が合計で9割近くとなっていた（図表3）。そのため、家庭という身近な環境において、世代間の楽曲の知識に関する差を感じやすいことが分かる。

図表2：「両親や祖父母など、『身近な大人』にとってなじみのある曲が、自分は全く知らない曲だった、といった経験はありますか。」



出典：筆者作成

図表3：「その『身近な大人』とは」



出典：筆者作成

この結果が物語るように、民謡やご当地ソングが若年層に浸透していない、というイメージはある程度現状を正確に物語っていると考えられる。それでは、浸透しない原因とは具体的にどのようなものなのか。

民謡が若年層に浸透しない理由に関して、独自に見解を述べている専門家がいます。島添（2021）は、仕事歌を狭義の民謡と捉えるとともに、民謡を見聞きする機会が二十一世紀の現在になって衰退していることを指摘している。例えば、田植え歌に関していえば、二十世紀の間は田植えをしながら田植え歌を歌った経験がある人や、歌った経験がない場合でもそれを見聞きした経験のある人が少なくなかったが、現在ではそうした経験をするのが不可能となっている（島添、2021）。こうした背景には、高度経済成長期以降の都市への一

極集中など、日本人の生活の変化が深くかかわっていると推測できる。

「Molten Soul Records」(詳しくは次章で述べる)の中心的人物である田崎薫氏も、「民謡は年寄りの音楽であるというイメージが強い」と考えている。実際、宮崎県高千穂町の民謡である『刈干切唄』の歌い手が田崎氏と会った際に、このように発言していたという。

「自分が若い頃も、民謡は年寄りの音楽であると考えており、まさか自分が民謡を歌うとは思っていなかった。」

さらには、音楽の教科書で J-POP の曲が掲載されるケースが増えており⁴、相対的に民謡などの伝統的な楽曲に触れる機会が減り始めている、ということも原因と考えられる。

図表 4 は、中学校及び高等学校の音楽教科書におけるポピュラー音楽の採用曲数の推移を示したものである。特に高等学校においては、ポピュラー音楽の掲載される曲数が著しく増加しており、1975～1977 年と 2002～2004 年を比較すると最大で 10 倍近く増えている。

図表 4：音楽教科書におけるポピュラー音楽採用曲数の推移

中学校の音楽教科書

	1972 年度版	1981 年度版	1993 年度版	2005 年度版
教育出版社	0	3	13	5
教育芸術社	0	4	1	3

高等学校の音楽教科書

	1975～1977 年	1984～1986 年	1993～1995 年	2002～2004 年
教育出版社	1	0	10	16
教育芸術社	7	7	10	14
音楽之友社	3	9	15	9

※ただし高等学校の音楽教科書は学年によっては 2 種類の教科書があるため、その両者に採用された曲数の平均数で示すこととする。

表出典：安部有希、伊藤英 (2008) 「音楽教科書におけるポピュラー音楽；教材としての意義と可能性」『岐阜大学カリキュラム開発研究』Vol.25、No.2、56-64 表 1 を元に独自に作成

近年では AKB48 の『365 日の紙飛行機』のように、現代を代表するアイドルグループの楽曲が扱われることも多いという。筆者が小学 1 年次であった 2007 年当時に配布された歌集でも、『世界に一つだけの花』(2002 年にリリース⁵) や、テレビアニメ『忍たま乱太郎』の主題歌である『勇気 100%』(1993 年に発売⁶) など、(当時としては)「最近の曲」が掲載

されていたが、割合としては極めて小さいものであった。そのため、J-POP など、若年層に人気のある曲が掲載される頻度は年々高まっていると考えられる。

第2章 若者に浸透しない本当の理由

ここまで述べてきた現状だけを鑑みれば、「地域ゆかりの楽曲」が若者に浸透しない理由について、単純に「彼らがこうした楽曲に触れる機会が少ないため」と断言せざるを得ない。この章では、今回の執筆にあたり調査を行った事例を元に、本当に若者は地域ゆかりの楽曲に馴染みがないのか、ということについて検証する。

2-1. 作曲家の記念館の事例

わが国には、地域が生んだ、もしくはゆかりの作詞家や作曲家を顕彰した記念館がある。溝尾（2011）は著書『ご当地ソング、風景百年史』で、4つの「うたの威力」について提言しており、その際4つ目で作詞家・作曲家の記念館の可能性について言及している。

- ① うたがヒットすると地域の知名度がアップし観光客が急増すること
- ② うたのヒットが地域の魅力に貢献していること
- ③ うたを作り地域を宣伝しようという動き
- ④ 地域が生んだあるいはゆかりの作詞家や作曲家、歌手を顕彰した記念館をつくり、地域の誇りとして全国に発信していること

先述の溝尾の提言が正しければ、これらの記念館も地域ゆかりの楽曲を年齢問わず広めるにあたって、大きく貢献することになる。

日本全国にある記念館のうち、古関裕而記念館、古賀政男記念館、中山晋平記念館に対し、2022年の8月にインタビュー形式での調査を行った。ここで、それぞれの作曲家および彼らの記念館を調査対象とした理由について触れる。

古関裕而は福島県福島市出身の作曲家である。『栄冠は君に輝く』『オリンピック・マーチ』といったスポーツ音楽の他、校歌や歌謡曲の作曲にも関わっている。また、2020年に放送された連続テレビ小説『エール』において、モデルとなった⁷人物でもある。この古関裕而の記念館は、オール福島で「古関裕而のまち・福島市」にふさわしいまちづくりを進めるため、官民協働による「古関裕而のまち・ふくしま協議会」を立ち上げ、町づくりに取り組んでいる⁸。こうしたことから、楽曲を地域振興に活用する事例として大いに参考にできると考え、調査対象とした。

古賀政男は、昭和期の代表的作曲家・ギタリストであり、5,000曲とも言われる彼の楽曲は「古賀メロディー」として親しまれている⁹。作品としては、『誰か故郷を想わざる』『東

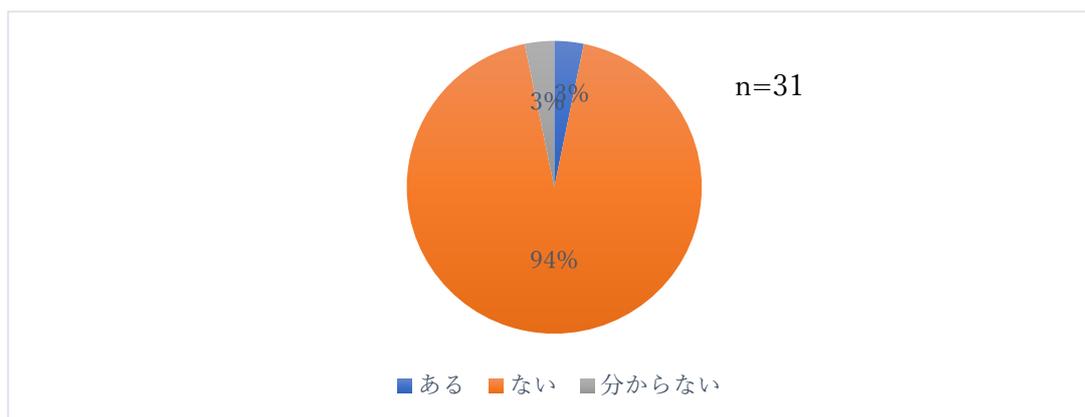
京ラブソディ』などが挙げられる。また、筆者と同じく明治大学出身であり、現在も活動を継続している明大マンドリン倶楽部の創設にも参画している¹⁰。特に彼が主将になって以降は、独自の「何でも弾いてやろう」というフロンティア精神が底流となっており、また彼の「音楽は和なり」の教えが現在にまで受け継がれているという¹¹。こうしたことから、古賀政男の楽曲の影響力の大きさがわかる。

中山晋平は長野県中野市出身の作曲家である。『東京行進曲』といった流行歌、さらには『須坂小唄』などの新民謡の作曲に関わった。なお、新民謡とは、大正期後半（1920年頃）から昭和期にかけて、地方自治体や地方の企業などの依頼によって、その土地の人が気軽に唄ったり踊ったりできて愛郷心を高めるため、またその地区の特徴・観光地・名産品などを全国にPRする目的で制作された歌曲¹²のことである。その他にも『シャボン玉』『てるてる坊主』など、幼少期に誰もが一度は耳にしたであろう童謡の作曲にも携わっている。このように、若年層にも比較的知名度が高い楽曲を世に出している作曲家の記念館の事例を知ることによって、「地域ゆかりの楽曲を若年層に広める」という今回のテーマのヒントになると考えた。以上の理由から、調査対象とした。

これらの3つの記念館は、いずれも60代以上の方が多く訪れる傾向にあり、この点も「地域ゆかりの楽曲＝古い歌」というイメージに繋がっている要因の一つであると言える。

ここで、アンケートの結果を再び引用して説明する。20代31人に対し、「有名な作詞家・作曲家の記念館を訪問したことはありますか」という質問をしたところ、「ある」と回答した人は全体のわずか3%にとどまった（図表5）。このアンケートの結果も、若者が作詞家・作曲家の記念館を訪れる機会の少なさを反映しているといえる。

図表5：「有名な作詞家・作曲家の記念館を訪問したことはありますか。」



出典：筆者作成

これらの記念館の事業の共通点の一つは、実際に楽曲を聞く機会を与えている点である。特に中山晋平記念館では、館内の設備、展示物、さらには庭園と、中山晋平の楽曲に触れることのできる場面があらゆる箇所に設けられている（図表6）。

図表 6：中山晋平記念館の各コーナー

入口	9時から17時まで、中山晋平の楽曲を時報として用いるカリヨンがある。例えば、来館者の来訪時にはウェルカムカリヨン、帰宅の際にはお見送りのカリヨンとして用いられる。
庭園	『證誠寺の狸囃子』をモチーフにしたモニュメントがある。こちらは、ボタンを押すことで『シャボン玉』の音の流れ、口からシャボン玉が空高く舞い上がる仕組みとなっている。子供たちが社会科見学で訪れた際、皆一列になって順番に押して楽しんでもらったという話もある。
第一展示室	ラップ型の蓄音機があり、当時の中山晋平による伴奏を記録したSPレコードが掛けられている。 ホールでは、中山晋平の生涯に関する映像を上映している。また上映前には、中山晋平が愛用していたグランドピアノやオルガンの音色を、来館者が選んだ曲で、その曲の背景とともに聴いてもらっている。その際は、ただ受け身の形式で聞くのではなく、来館者からの質問に答えるなど、参加型の形式がとられている。
第二展示室	リスニングコーナーでは、好きな曲を自分で選んで流しつつ、展示物を見ることが可能になっている。

出典：中山晋平記念館副館長、青木氏へのインタビュー内容を元に独自に作成

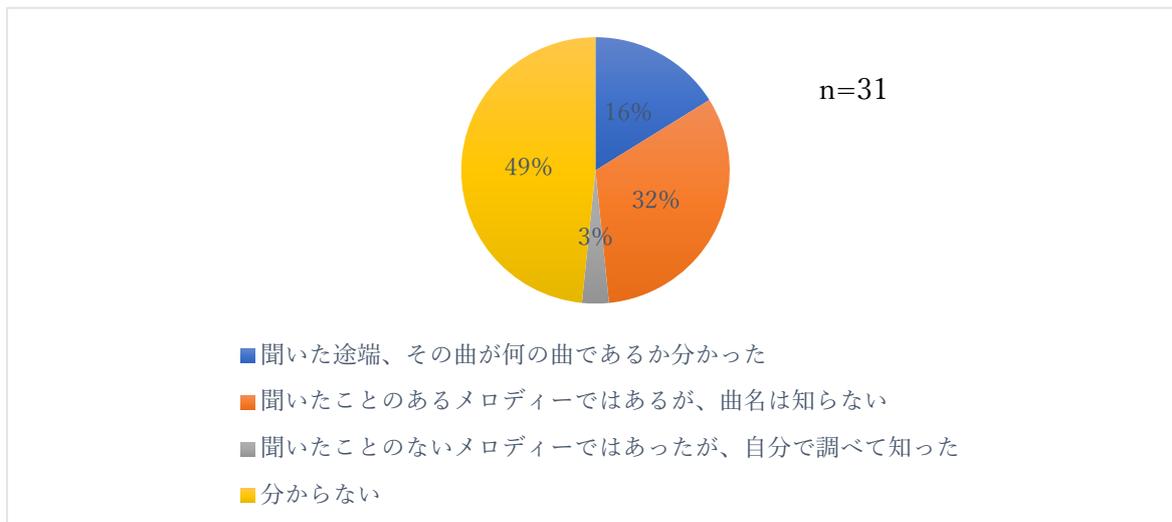
2-2. 若者は本当に「地域ゆかりの楽曲」を知らないのか

記念館へのインタビューを行う中で、事業内容のみならず、それぞれの作曲家の楽曲に関する情報もいただいた。その結果、「地域ゆかりの楽曲が若年層に浸透してないのは、彼らがそれらの楽曲を聞く機会が少ないためである」という認識が必ずしも適切でないことが分かった。その根拠について、古関裕而記念館及び中山晋平記念館へのインタビュー内容を元に説明する。

例えば、福島駅前には古関裕而のモニュメント像が設置されており、定時になると古関メロディーが流れるという。また、福島駅では新幹線の発着メロディーに「栄冠は君に輝く」、在来線の発着メロディーに「高原列車は行く」を採用している。駅などの公共交通機関は、社会人、学生など、年齢・立場を問わず多くの人に利用されるものである。そのため、福島駅では、古関裕而、もしくは彼の楽曲を知っているか否かに関わらず、子供からお年寄りまで全年齢の人々が古関メロディーを耳にしていることになる。

実際、アンケートを通して、回答者がよく使う駅で流れるメロディーに関して調査を行ったところ、約半数が「聞いた途端、その曲が何の曲であるか分かった」「聞いたことのあるメロディーではあるが、曲名は知らない」と回答していることが分かった（図表 7）。そのため、古関メロディーのみならず地域ゆかりの楽曲を、駅などの公共交通機関で無意識に聴いている人が一定数いることが分かる。

図表7：「自分がよく使う駅で流れるメロディーについて」



出典：筆者作成

また、中山晋平記念館の副館長の青木氏によると、長野県須坂市や中野市の市民祭、保育園・小学校の体育祭では、最後に中山晋平の作曲した「須坂小唄」や「中野小唄」といった新民謡が最後に流れて、保護者の方と一緒に踊ることがあるという。そのため、須坂市や中野市に住むほぼ全ての人が、保育園や学校行事を通して必ず1度は聞いているということになる。また、有名な作詞家・作曲家を輩出している地域でなくても、作詞家・駅の発着メロディーや時報など、意図せずとも耳に入るような形で楽曲に触れる機会が多いと思われる。

こうしたことから、我々日本人は年齢を問わず、古くから伝わる地域ゆかりの楽曲を、何らかの場面で一度は聞いていることが分かる。それにもかかわらず若年層に浸透していない原因は、楽曲とその地域の繋がりを知る機会が少なく、楽曲を聞いてもその曲に関心を持つことに繋がらないからではないかと考えられる。また、こうした「楽曲と地域のつながり」を人々に強く実感させるのが、まさに記念館の事業、そして先述の「須坂小唄」や「中野小唄」のように、地域の学校行事などのイベントで使用される楽曲であるといえる。

第 3 章 学校教育や現代風アレンジが果たす役割

アンケートの結果を基に、現代の若者が地域ゆかりの楽曲に関してどのような意識を持っているのかについて考察する。

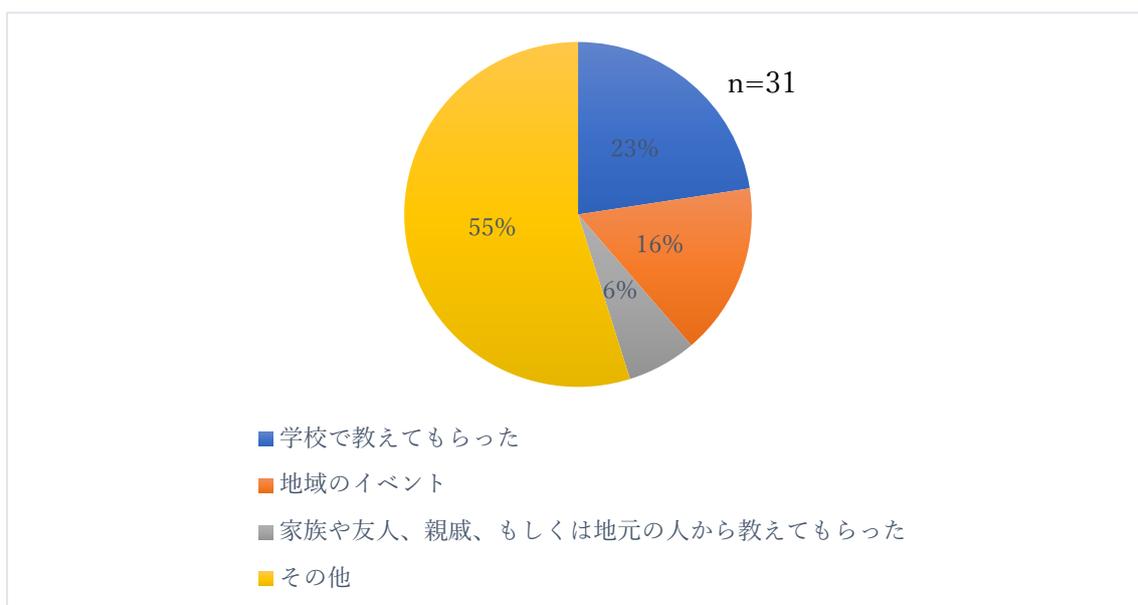
3-1. 学校教育が果たす役割

調査の結果、地域ゆかりの楽曲の普及において、学校教育が特に大きな役割を果たしていることが分かった。

地域ゆかりの楽曲を知ったきっかけのうち、「その他」を除く回答については、「学校で教えてもらった」と回答した人が最多で、23%となっている（図表 8）。

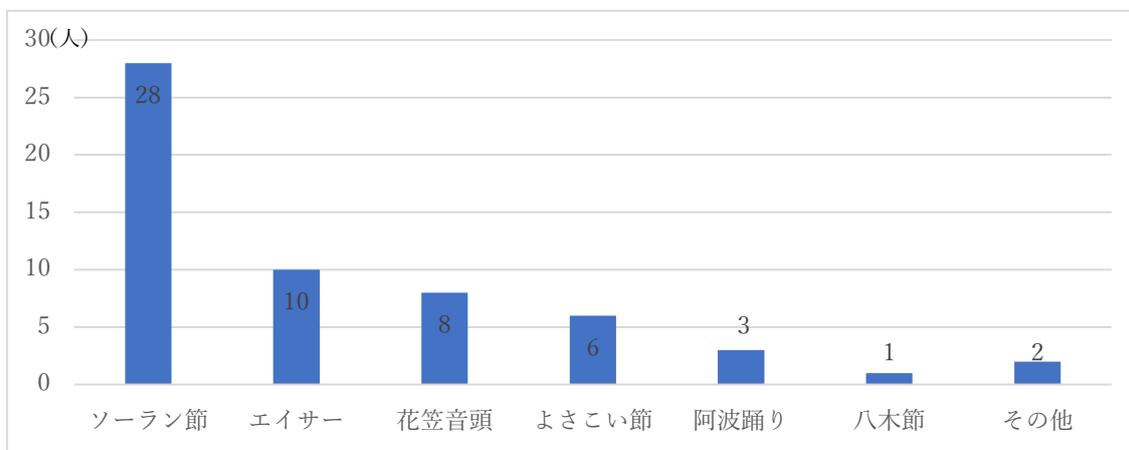
また、地元ゆかりのある楽曲でなくても、学校の授業や運動会などの学校行事は、日本の民謡に触れる機会になることが多い。それらの学校行事で扱われた楽曲について調査したところ、ソーラン節が最多で 28 名の回答をいただいております（図表 9）、それらの楽曲を知ったきっかけについても「学校行事」という回答が最多の 29 名となった（図表 10）。

図表 8：「地域ゆかりの楽曲を知ったきっかけ」



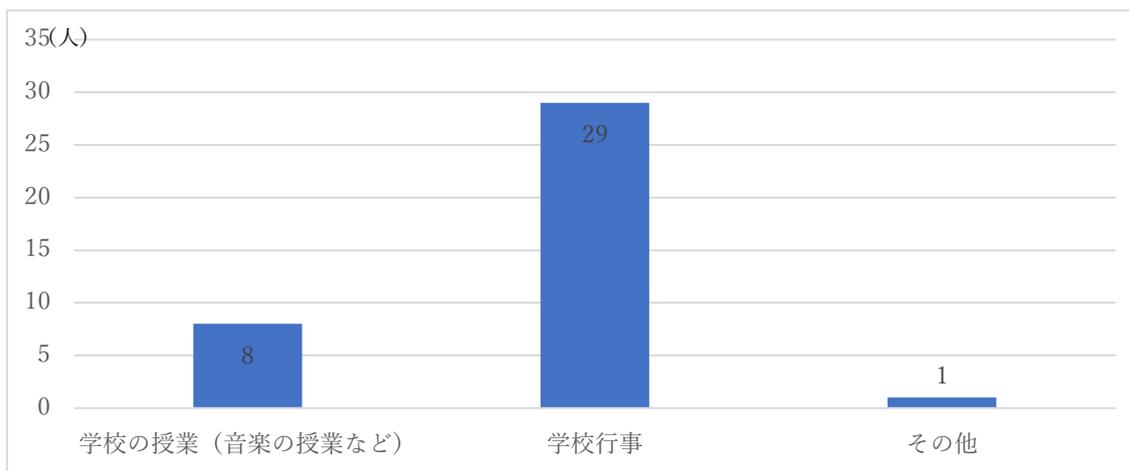
出典：筆者作成

図表 9：「地元にはゆかりのあるものではないが、学校の授業や運動会などの学校行事で、歌ったり踊ったりした楽曲について」



出典：筆者作成

図表 10：「その楽曲に触れたきっかけについても詳しく教えてください。」



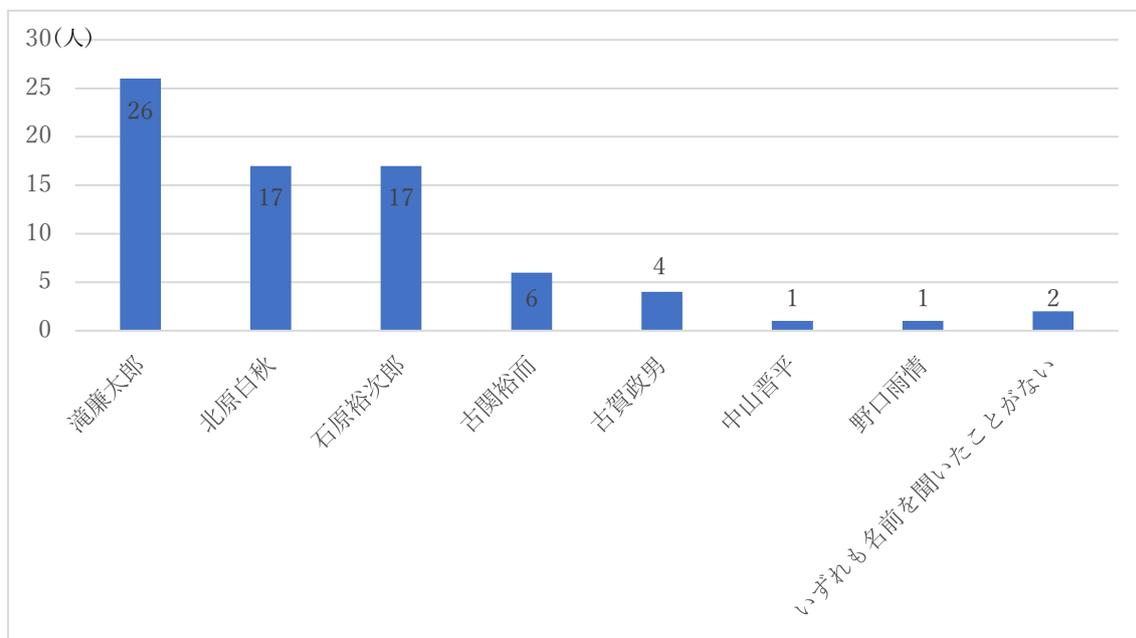
出典：筆者作成

また、学校教育はこれらの楽曲を作詞・作曲した人物を知るきっかけともなっている。アンケートの結果からは、明治日本を代表する作曲家である滝廉太郎や、数多くの童謡の作詞に携わった北原白秋、さらに俳優・歌手の石原裕次郎といった人物に関しては、若年層の間でも比較的知名度が高いことが分かった。実際、滝廉太郎については26名、北原白秋と石原裕次郎についてはそれぞれ17名が「名前を聞いたことがある・知っている」と回答している。一方で、インタビュー先の記念館で扱われていた古関裕而、古賀政男、中山晋平に関しては知名度が低い傾向にあり、特に中山晋平に関しては「名前を聞いたことがある・知っている」という回答は1人のみであった（図表11）。

そして、これらの人物を知るきっかけとなっているのもやはり学校の授業である（図表

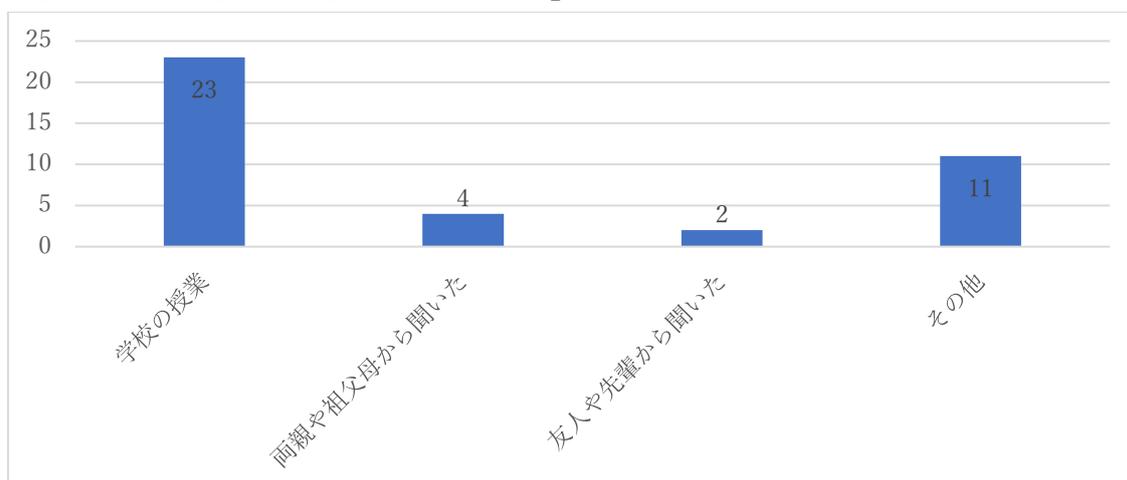
12)。

図表 11：「次の作詞家・作曲家の中で、名前を聞いたことがある・知っている人物の名前はあるか。」



出典：筆者作成

図表 12：「人物を知ったきっかけについて」



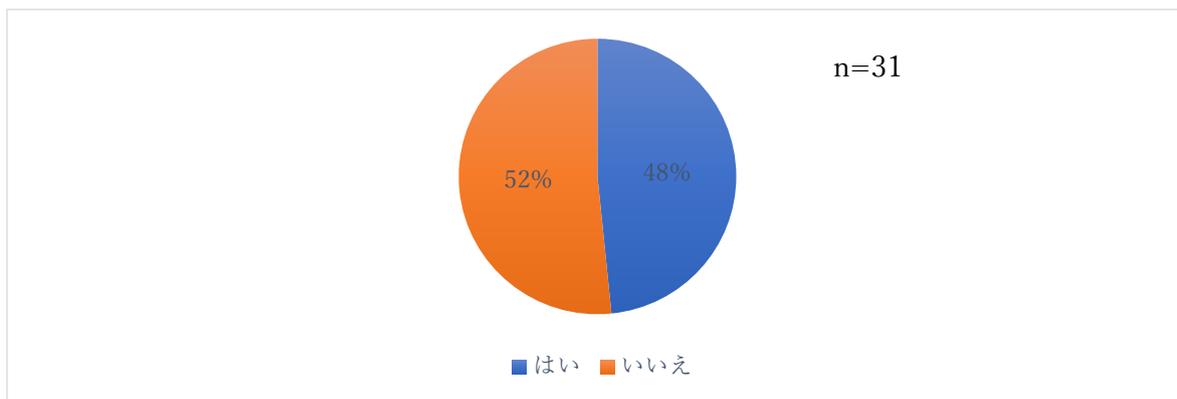
出典：筆者作成

さらに学校教育は、「知るきっかけ」のみならず、「関心を持つきっかけ」ともなっている。

図表 2、3 で扱った「身近な大人にとってなじみがあるが、自分が全く知らない楽曲」について関心をもったか否かについて質問をしたところ、「関心を持った」と回答した人、「関心

を持たなかった」と回答した人がいずれも半数近くと、ほぼ等しく意見が分かれた（図表 13）。

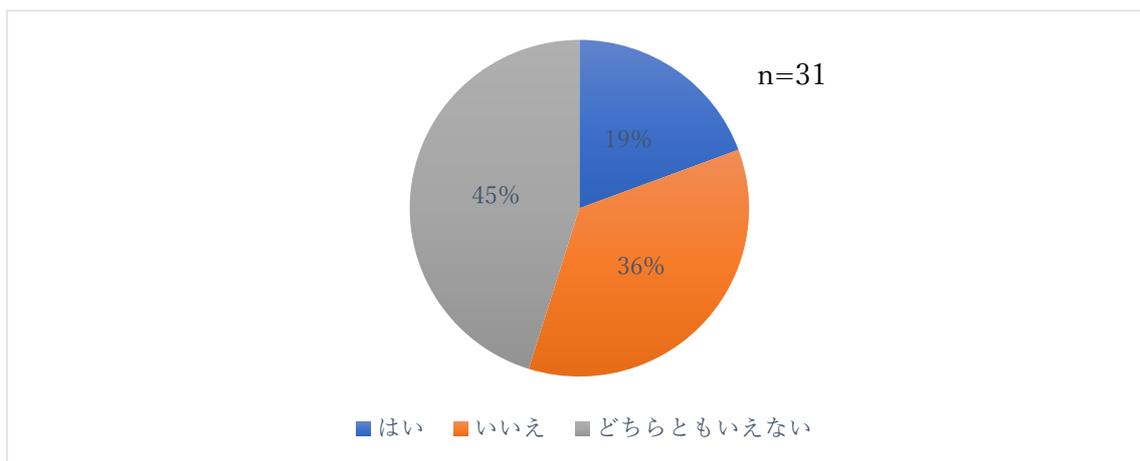
図表 13：『身近な大人』にとってなじみがあるが、自分が全く聞いたことのない曲について、興味を持ちましたか。もしくは、実際に視聴してみましたか。」



出典：筆者作成

また、自分の住む地域ゆかりの楽曲について、実際に歌ったり踊ったりしたことがある人に対して、同様の質問をしたところ、「関心を持たなかった」「どちらともいえない」と回答した人を合わせて 81%という結果となった（図表 14）。

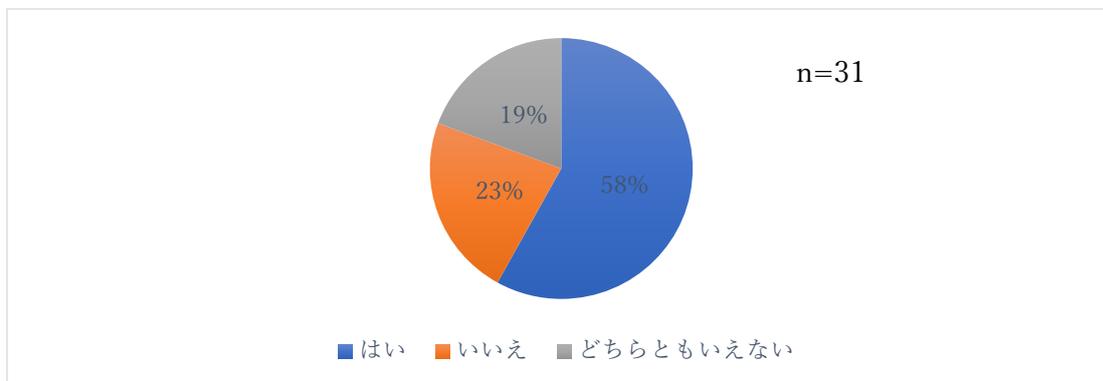
図表 14：「自分に住む地域ゆかりの曲を知った、もしくは実際に歌ったり、踊ったりしたことがきっかけで、曲に対する関心は高まりましたか。」



出典：筆者作成

一方、図表 9、10 で扱った、「地元ゆかりのあるものではないが、学校の授業や学校行事で触れた楽曲」については、58%が「関心を持った」と回答している（図表 15）。

図表 15 : 「地元ゆかりのあるものではないが、学校の授業や運動会などの学校行事で、歌ったり踊ったりした楽曲について、関心は高まりましたか。」



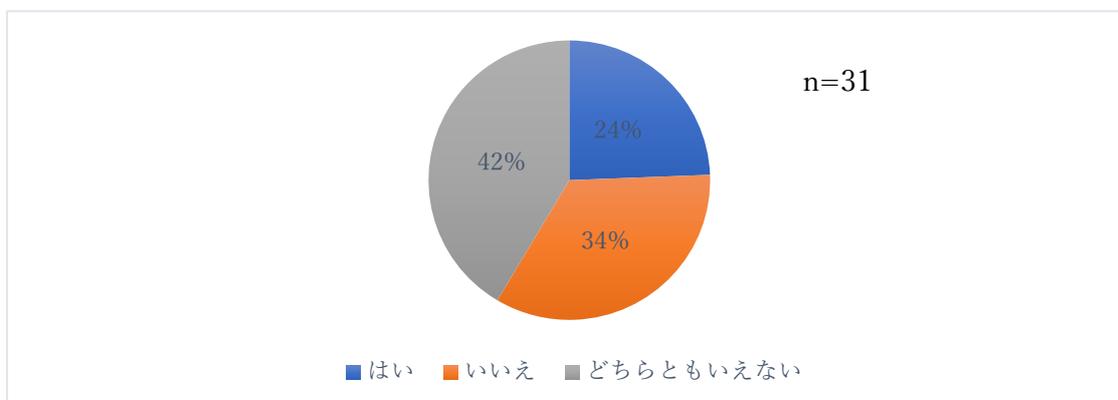
出典：筆者作成

図表 13～15 を比較すると、学校教育が他の手段と比べて、楽曲に関心を持つきっかけになりやすいことが分かる。

3-2. 学校教育における課題

こうしたアンケート結果から、筆者は「なぜ学校教育が楽曲に関心を持つきっかけになりやすいのか」という疑問を抱いたため、アンケートを 20 代 31 人に対して 12 月中旬に再度行い、学校教育における民謡の体験に絞って調査した。このアンケート（以下、2 度目のアンケート）においては、31 人全員が「学校の授業や学校行事で日本の民謡に触れたことがある」と回答した。しかし、「授業や行事で取り組んだことで、その民謡への興味・関心は高まりましたか」といった質問に対しては、「はい」という回答が 24%、「いいえ」が 34%、「どちらともいえない」が 42%という結果になった（図表 16）。

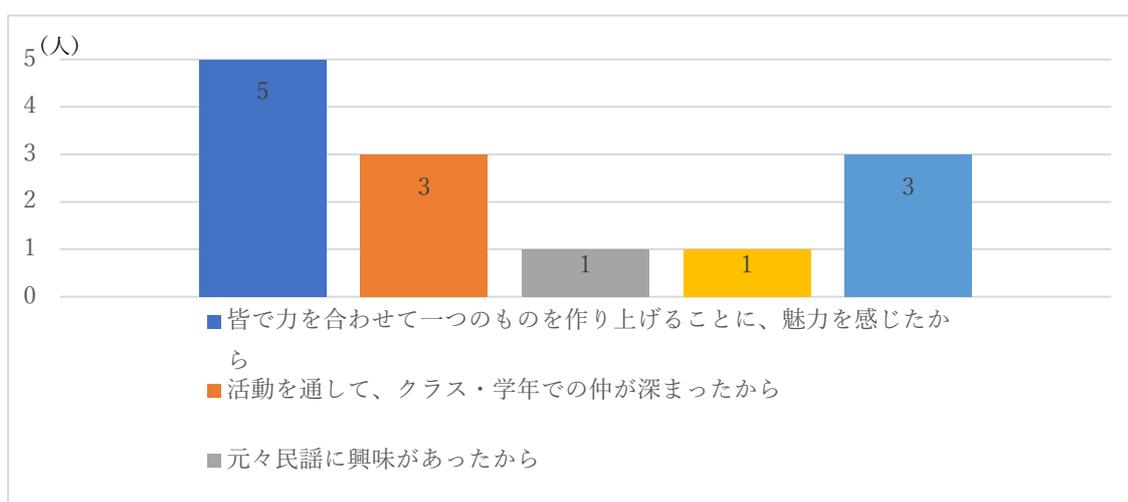
図表 16 : 「授業や行事で取り組んだことで、それらの民謡への興味・関心は高まりましたか。」



出典：筆者作成

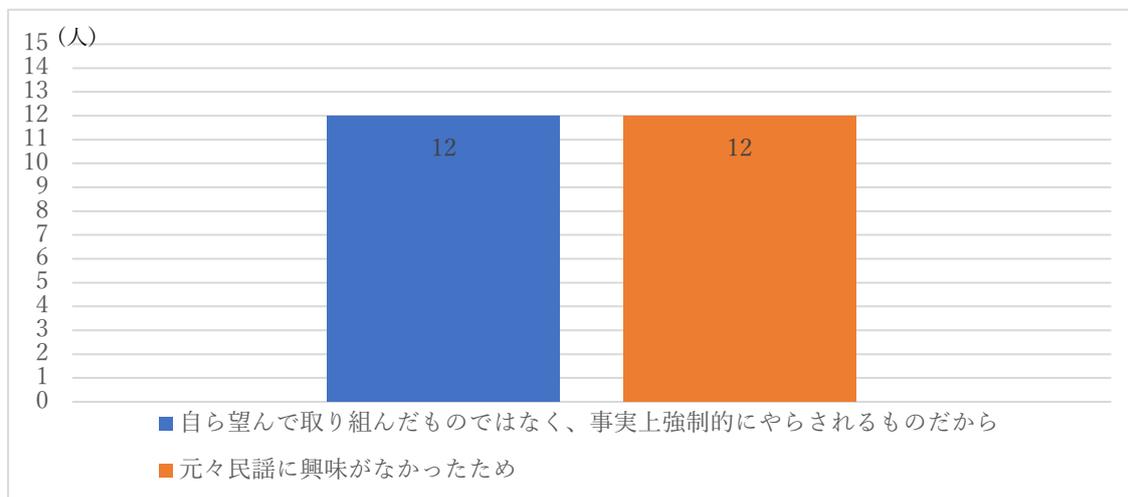
さらに、先述の質問について「はい」と回答した人、及び「いいえ」「どちらともいえない」と回答した人、それぞれに理由を尋ねた。その結果、「はい」と回答した人の理由としては、「皆で力を合わせて一つのもを作り上げることに魅力を感じたから」という回答が最多で5人となり、次いで「活動を通してクラス・学年の仲が深まったから」というものが3人という結果となった（図表 17）。一方で、「いいえ」「どちらともいえない」と回答した人に関しては、「自ら望んで取り組んだものではなく、事実上強制的にやらされるものだから」「元々民謡に興味がなかったため」という2つの理由のいずれかに絞られ、またいずれも12人から回答をもらっている（図表 18）。

図表 17：「先程の『授業や行事で取り組んだことで、それらの民謡への興味・関心は高まったか。』という質問で、『はい』と答えた人は、その理由について教えてください。」



出典：筆者作成

図表 18：「先程の『授業や行事で取り組んだことで、それらの民謡への興味・関心は高まったか。』という質問で、『いいえ』『どちらともいえない』と答えた人は、その理由について教えてください。」



出典：筆者作成

これらのアンケート結果から、以下のようなことがいえる。

- ① 学校行事や授業において民謡に触れさせることは、力を合わせて一つのものを作り上げることで交友を深めるとともに、若い世代の民謡そのものへの興味・関心を深める可能性を秘めている。
- ② その一方で、学校教育においては、事実上強制的に民謡に触れさせられる形となるのもまた事実である。図表 16 のグラフにおいて、「いいえ」という回答が「はい」という回答を 10%と僅かに上回ったのも、この「強制的である」という点が原因の一つといえる。
- ③ さらに、学校で触れる前にどれだけ民謡に親しみを持っていたかどうかも、学校教育を通して民謡に関心を持てるかどうかにつながる。「元々民謡に興味がなかったため」という回答は、それを物語っている。

① に関しては、実際の事例が証明している。岐阜大学大学院教育学研究科が1年次の学生を対象に、「音楽教育実践研究」を開講した。またこの授業の一環として、2015年6月23日に、岐阜大学附属小学校4年生3組の児童35名に対し、「飛騨やんさ」を体験する実践授業が行われた。授業後に「今日の授業で楽しかったこと、考えたこと、思ったこと、気づいたこと等を書きましょう」と記したアンケートと記したワークシートで児童の反応を調べたところ、「歌や踊りが楽しかったです。」という回答が最も多く、またそれらの回答の中では「みんなで歌ったり踊ったりするのが楽しかったです」という記述もあったという(松永、槇本、久保田、長谷川、2022)。

② も同様である。山崎（2005）は、2003年9月10日から同月11日までの2日間、富山県東砺波群平村及び上平村において、学校で取り入れられている民謡に対して関わりの深い人物7名に対してインタビュー調査を行った。そしてこの7名のうち、D、E、F、Gという4人の中高生の回答を分析している。この4人のプロフィールは以下のとおりである（図表19）。

図表19：音楽教育実践研究において調査対象となった、4人の中高生のプロフィール

氏名	年齢	職業	備考
D	14歳	中学校生徒	平家太鼓で太鼓のパートを練習していた
E	14歳	中学校生徒	手踊りのパートを練習していた
F	15歳	中学校生徒	進学は地元ではない高校を希望している
G	18歳	高校生徒	郷土芸能部に所属し、民謡に対する学習意欲が高い

出典：山崎瞳（2005）「郷土芸能を通じた学校の取組みに関する研究」（2005）『佛教大学大学院紀要』第33号 279-289 「表1-2 インタビュー対象者の属性」を元に独自に作成

Dさんに現在行っている郷土芸能に関する活動（民謡とこきりこ）について「これからも続けていこうと思いますか」と尋ねたところ、「続けていきたい」と回答したという。またGさんに対して郷土芸能部への入部理由を尋ねた際には、「昔から（他の人が取り組んでいるのを）見てていいなあと思った」「自分は4人兄弟であるが、兄弟が皆取り組んでおり、自分も自然に入っていた」と回答しており、また「小さい頃から踊っていて、嫌だと感じたことはありませんか」と尋ねた際には、「全くない。これが当たり前であるため」と回答していた。この2人は民謡に対して強い興味・関心を抱いているといえる（山崎、2005）。

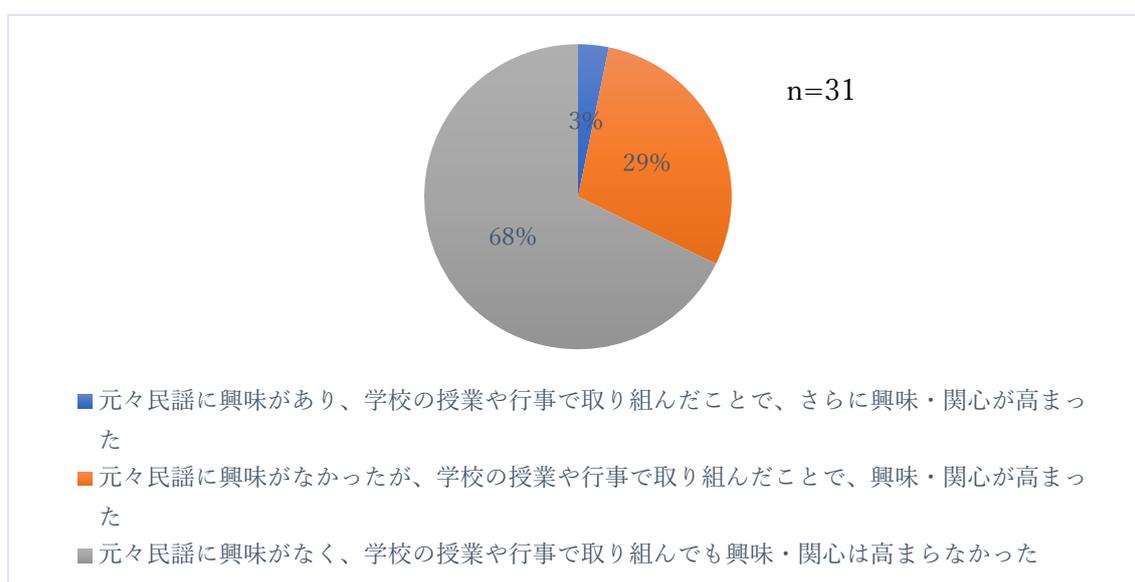
その一方で、EさんやFさんのように、授業で民謡を扱うことに不満を感じていると思われる回答をしている生徒もいたという。実際、Eさんは民謡について「楽しい」と発言している一方で、「授業のなかで郷土芸能をやることに対してどう思いますか」と尋ねられた際には「やりたくないとは思わないけど・・・」と答えることをためらっており、また「これからも続けていきたいと思いますか」と尋ねられた際には「・・・わかりません。」と答えに窮している様子であった。また、Fさんは「これからも続けていきたいと思いますか」という質問に対しては、「続けないと思う」とはっきり否定していた（山崎、2005）。

こうした回答から、山崎（2005）は、彼女たちは村や郷土芸能に対し誇りをもっているとは限らず、「他の子がやっている」「やらないと変な目で見られる」というように、外部からの強制により民謡をやらされている、という思いがインタビューに表れている、と推測している。

さらに、③についても2回目のアンケート結果を用いて証明できる。アンケートの設問

のうち、「授業や行事で取り組む前は、それらの民謡に興味・関心を持っていましたか」及び「授業や行事で取り組んだことで、それらの民謡への興味・関心は高まりましたか」に対する回答を元に、学校教育で触れる前の民謡に対する関心の高さと、触れた後の民謡に対する関心度の変化の関係を分析した。その結果、「元々民謡に興味はなかったが、学校の行事や授業で取り組んだことで、興味・関心が高まった」というケース（29%）を、「元々民謡に興味がなく、学校の行事や授業で取り組んでも興味・関心は高まらなかった」というケース（68%）を倍以上上回っていることが分かった（図表 20）。

図表 20：元々の民謡への興味・関心と、学校の授業や行事で取り組んだ後の興味・関心の変化の関係



出典：筆者作成

地域のイベントなど他の場面と比べて相対的に評価すれば、学校教育が若い世代に民謡を知ってもらおう大きなきっかけとなっていることは事実である。しかし、図表 16 及び図表 20 が示す通り、絶対的に評価した場合、学校教育が若年層に民謡を浸透させるきっかけとしての役割を十分に果たしているとは言い難い。そのため、子供たちに「強制されている」と感じさせない工夫が学校教育に求められる。また、子供たちが日常的に民謡に触れ、関心を抱いているか否かも深くかかわってくることを踏まえると、学校教育の枠にとらわれず積極的に民謡に触れる機会を作っていくことが必要であるといえる。

3-3. 現代風にアレンジされた民謡

さらに、わが国に古くから伝わる民謡を、新しい時代に合った形で継承する動きもある。その事例が、「Molten Soul Records」が行っているプロジェクトである。

「Molten Soul Records」とは、宮崎発の民謡専門音楽出版会社であり、日本の「民謡」を現代音楽としてリメイクし世界に発信する活動¹³を行っている。見える化株式会社の代表取締役、田崎薫氏が活動の中心となっており、またミュージシャンのヒロシワタナベ氏が楽曲制作を担当している¹⁴。

田崎氏は CD を約 3,000 枚、レコードを約 2,500 枚所持していたほど、音楽を好んでいた。しかし、「音楽を買うのはやめて、音楽を発信していく立場になりたい」「行うのであれば、自分にしかできず、誰もやっていないことをしたい」と考え始めた。その結果、出身地である宮崎県高千穂町に伝わる民謡、「刈干切唄」を海外に伝える、という結論に至ったという。その背景にあったのが、「自分が小学生の頃から海外の音楽に影響を受けてきたので、反対に海外の方に日本の音楽に興味を持っていただくこともできるのではないか」という田崎氏自身の考えであった。

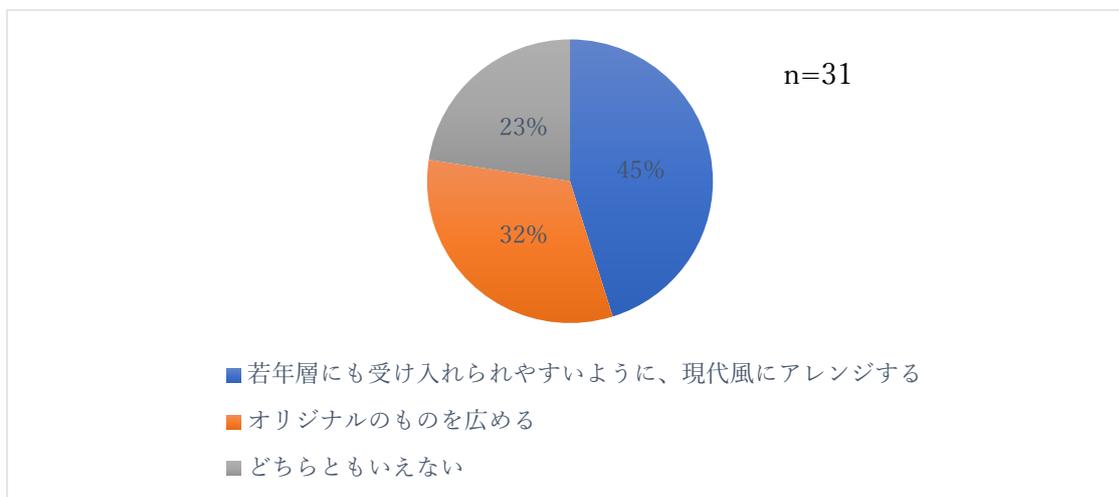
このプロジェクトが立ち上げられたのは 2019 年であり、その翌年に開催予定であった東京オリンピックがきっかけであった。そのため、海外から観客が訪れることを想定し、わが国の伝統文化である民謡を発信しようと試みていたと考えられる。新型コロナウイルス感染症の流行により東京オリンピックが延期され、無観客開催となったため、想定した効果は得られなかった。しかし、このプロジェクトは、民謡の発信がインバウンド需要に繋がり得ることを示唆している。

実際にインバウンド需要の獲得に使うのであれば、どうすればよいのか。田崎氏は、「海外の人々にとって耳障りが良いものに（原文ママ）リメイクすること、そして何らかの『きっかけ』を作ること」が、日本の民謡を海外に発信していくうえで重要であると発言している。

一方で、相反する意見もある。大洗町商工観光課の関洗平氏は、「日本語であるからこそその語感やリズムが民謡の独創的な部分でもある」「民謡の多言語版の動画を発信することは、PR だけを考えれば良い手法であるが、本来の『磯節』を広めることを考慮すると、日本語のまま、いかにして海外の方の目に触れ、耳にする機会を創出するかどうかをより考えていくべき」と発言している。

これらについてもアンケートをとったところ、「若年層にも受け入れられやすいように、現代風にアレンジする」と回答した人（以下、アレンジ派）が 45%、「オリジナルのものを広める」と回答した人（以下、オリジナル派）が 32%いることが分かった（図表 21）。前者が後者を 13%上回っているものの、ほぼ二分されていると言っても過言ではない。

図表 21：「若年層に民謡などの地域に古くから伝わる楽曲を広めるには、『時代に合ったものにアレンジするか』『オリジナルのものを広める』どちらの方が良いと考えますか。」



出典：筆者作成

アレンジ派の意見としては、予想した通り「若者に馴染みのあるメロディーの方が聞きやすい」というものもあり、さらには「アレンジすることで興味を持ってもらいやすくなり、オリジナルの楽曲を知ることにつながる」と主張する意見もあった。

一方で、オリジナル派の意見としては、「アレンジした場合、元々の楽曲を知ることがなくなってしまうため」「本来の楽曲を知ってもらえなければ、その後興味関心が広がっていくことにはつながらない」というものが挙げられる。

先述のように意見が二分されているものの、両者の意見には共通点がある。それは、「楽曲を知るきっかけ」を重視している点である。

3-4. オリジナルの楽曲か、あるいはアレンジした楽曲か

今回のテーマからは外れるが、2回目のアンケートにおいて、多くのアーティストにカバーされている曲を3曲挙げ、それらに関してアンケートをとった。そして、若者の心理として、オリジナルの曲とアレンジしたもの、どちらがきっかけで楽曲を知る傾向にあるのかを分析した。具体的には、一青窈の『ハナミズキ』、中島みゆきの『糸』、荒井由実の『卒業写真』であり、複数のアーティストによってカバーされている（図表 22）。

図表 22：調査対象とした楽曲と、カバーしたアーティストの一例

楽曲	カバーしたアーティストの一例
一青窈 『ハナミズキ』	新垣結衣、May J.、徳永英明
中島みゆき 『糸』	EXILE ATSUSHI、JUJU、柴咲コウ、Bank Band、クリス・ハート、一青窈(ひととよう)、吉岡聖恵、Uru、つるの剛士、Aimer、May J.、山崎育三郎、天童よしみ
荒井由実 『卒業写真』	いきものがかり、コブクロ、浜崎あゆみ、松山千春、槇原敬之、今井美樹、原田千世

出典：「多くのアーティストに愛される名曲 カバー曲特集—今週の Pick Up! | ひかり TV ミュージック」

https://music.hikaritv.net/music/music_static/m_column_post181015/data/index.html

(2022年12月5日アクセス) を元に独自作成

こうしたカバー曲は「民謡」及び「地域ゆかりの楽曲」に当てはまらないが、「曲を独自にアレンジした」という点で「現代風アレンジした民謡」と共通している。こうしたことから、民謡はオリジナルの楽曲とアレンジされた楽曲、どちらの形式である方が広まりやすいのかについて考察する際に大いに参考になると考え、アンケートの質問項目に加えた。

なお、質問項目は、以下のとおりである。

- ① 楽曲そのものを聞いたことがあるか。
- ② 楽曲を初めて聞いた際、リリース当時の歌手が歌ったもの（以下、オリジナルの楽曲）だったか、もしくは他のアーティストによってカバーされたもの（以下、カバー曲）だったか。
- ③ 楽曲を初めて聞いたときに限定せず、オリジナルの楽曲を聞いたことがあるか。
- ④ 楽曲を初めて聞いたときに限定せず、カバー曲を聞いたことがあるか。

さらにこれらの質問への回答を元に、3つの楽曲について、「最初にオリジナルの楽曲を聞き、その後カバー曲を聞いた」「初めて聞いたものはオリジナルの楽曲であったが、カバー曲は聞いたことがない」「最初にカバー曲を聞き、その後オリジナルの楽曲を聞いた」「初めて聞いたものはカバー曲であったが、オリジナルの楽曲は聞いたことがない」「その他」のそれぞれに該当する人の割合を調べた。ここではグラフは省略させていただくが、結果としては3曲とも、「その他」を除けば「最初にオリジナルの楽曲を聞き、その後カバー曲を聞いた」と回答した人が最も割合が多くなった。限られた情報ではあるが、カバー曲などアレンジされた楽曲に関しては「最初にオリジナルの楽曲を聞き、それがきっかけでカバー曲にたどり着く」人が多い傾向にあることが分かる。

一方で、それぞれの楽曲のリリースされた年も踏まえて考えると、「古い楽曲においては、オリジナルの楽曲が知るきっかけとなるケースは少なくなる」ということも分かる。実際、リリースされた年が最も早い『卒業写真』に関しては、「最初にオリジナルの楽曲を聞き、その後カバー曲を聞いた人の割合」は 6%と、他の 2 曲に比べて少なくなっている（図表 23）。これは、古い楽曲になるほど、若年層がリリース当時の歌手が歌っているものを聞くことが難しくなるためであると考えられる。

図表 23：最初にオリジナルの楽曲を聞き、その後カバー曲を弾いた人の割合、及びリリースされた年

曲名	最初にオリジナルの楽曲を聞き、その後カバー曲を聞いた人の割合	リリースされた年
『ハナミズキ』	10%	2004 年 ¹⁵
『糸』	22%	1992 年 ¹⁶
『卒業写真』	6%	1975 年 ¹⁷

出典：筆者作成

この結果を民謡などの「地域ゆかりの楽曲」に当てはめて考察する。図表 21 のグラフにおいては、アレンジ派の回答がオリジナル派の回答を 13%上回っていた。小さな差であるため、若年層に「地域ゆかりの楽曲」を広めるためには、現代風にあレンジした楽曲とオリジナルの楽曲、どちらが効果的であるのか、ということ結論付けるのは難しい。しかし、アレンジ派がわずかではあるもののオリジナル派を上回っていることを踏まえると、民謡など古くから歌い継がれている楽曲は、現代風にあレンジした方が若者にとって比較的親しみやすいことは間違いない。その理由としては、もちろんアンケートの回答にも合ったように「若者に馴染みのあるメロディーの方が聞きやすい」というものも当てはまる。しかし、民謡などの古い楽曲は近年のものとは比べて、オリジナルの楽曲を聞くことが必ずしも容易でないため、アレンジされたものの方が広まりやすい、ということも考えられる。

第4章 考察

この章では、若年層に地域ゆかりの楽曲を広めるに当たり、これまで触れた問題点を解決することのできる施策が具体的にどのようなものであるか、ということについて考察する。

4-1. トモエ学園の事例から学ぶ、「強制」させない教育

前章では、学校教育で民謡に触れることにおいて、子供たちに「強制的にやらされている」と思わせない工夫が必要であると述べた。再び論文の内容からは外れるが、この工夫を行うに当たっては、黒柳徹子氏が少女時代に通っていた「トモエ学園」の教育方針がヒントになる。

山田玲司(2007)は、著書『非属の才能』において、黒柳氏がトモエ学園に転校するまでの経緯、及びトモエ学園での教育方針について触れている。黒柳氏は、あまりに好奇心が強く、行動力があり、自主性に富んだ性格であったことから周囲とのトラブルが絶えず、最終的には小学校から退学を言い渡されてしまったという。退学後に彼女が転校したのが、トモエ学園である。

トモエ学園の授業スタイルの特徴として、日本の小学校に必ずある「時間割」がなく¹⁸、黒板に書かれた科目の中から子どもが好きなものを選んで勝手に始めることができる、というものが挙げられる(山田、2007)。しかし、今回注目すべきは、授業そのものではなく、授業後の散歩の時間である。

トモエ学園では、午前中で全ての授業が終わり、午後は散歩の時間となるのが基本であるが、まさに「授業外」であるはずのこの散歩の時間が、事実上理科や歴史の勉強の時間となっていたという(山田、2007)。具体的には、散歩をしながら「なぜ花は咲くのか」ということから「受粉」を学び、寺の像を見ながら歴史を学ぶ、といったものである¹⁹。

このトモエ学園の散歩の時間のように「学習」という名目ではなくても、必然的に新しい知識を得ることができるカリキュラムは、学校教育で民謡を扱う際にも参考にできる。名目上は「学習」ではないため、子供たちに「強制的にやらされている」と感じさせるリスクを減らすことができるためである。

4-2. シュタイナー教育から考える

トモエ学園以外にも、独自の教育方針を採用している教育機関は存在する。ここでは、シュタイナー教育について触れる。

シュタイナー教育では、「全人教育(知性だけではなく、生命力、肉体、感情など全体としてバランスが取れた自由人を育てる)」を目的としている²⁰。始まりは、オーストリア出身の専門家ルドルフ・シュタイナーの教育思想に基づいてドイツのシュツツガルトでモデル校を立てたことだとされている²¹。

このシュタイナー教育においては、人間は7年周期を繰り返して成長し、21歳で人間として完成すると考えられている²²。このうち、生まれてから小学1～2年生頃までが「第一七年期（身の周りの良いものも悪いものもすべて敏感に吸収する時期）」、小学1年生～中学3年生頃までが「第二七年期（美しいものをたくさん吸収し、感情や創造力が育っていく時期）」とされている²³。今回の論文のテーマである、「若年層に民謡などの『地域ゆかりの楽曲』を浸透させる」ということについて、シュタイナー教育に基づいて考えるならば、この「第一七年期」及び「第二七年期」が特に重要となる。

ここで、最初に行ったアンケートの複数の質問項目への回答を踏まえて分析する。今回用いているのは、以下の質問項目である。

- ① 両親や祖父母など、『身近な大人』にとってなじみのある曲が、自分は全く知らない曲だったという経験はありますか。（図表2に該当）
- ② その『身近な大人』とは誰ですか。（図表3に該当）
- ③ 学校の授業や学校行事で歌ったり踊ったりした楽曲について、興味・関心は高まりましたか。（図表16に該当する質問とは別のもの。図表16は2度目のアンケート結果を基に作成したグラフであるため。）

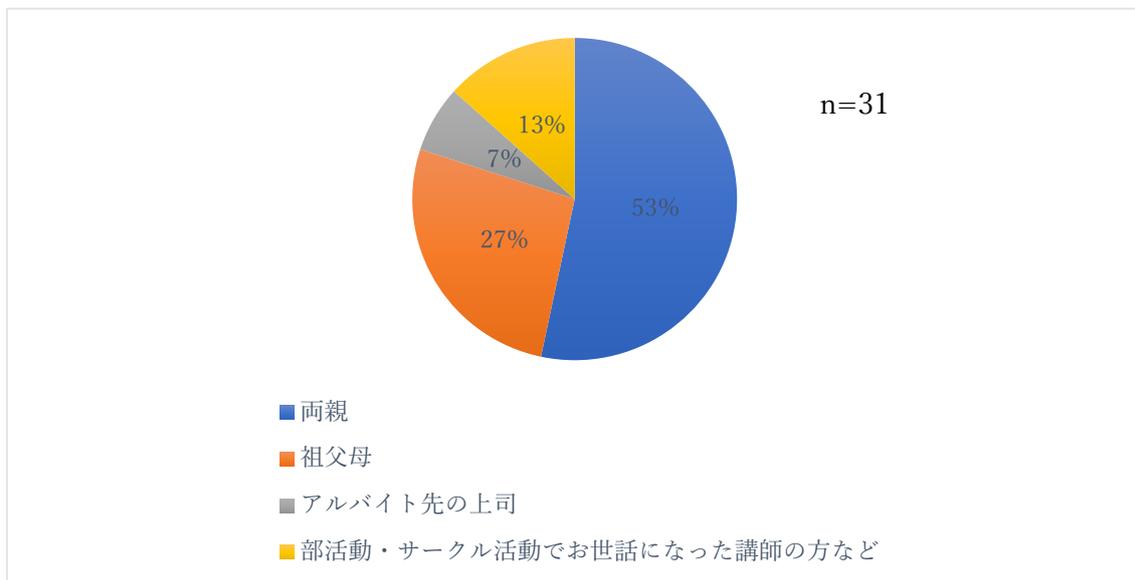
これらの3つの質問を元に、学校行事や授業がきっかけで民謡に関心を持った人は、どのような「身近な大人」との間で、楽曲に関する知識の差を感じた経験があるのかを分析した。これらの質問への回答を利用したのは、以下のような仮説があったためである。

「学校での体験がきっかけで民謡に興味を持つ人は、学校以外でもこうした古い音楽を体験している。具体的には、家族や親戚など、いわゆる「ジェネレーションギャップ」のある『身近な大人』を通して、古い楽曲について知る機会を多く得ている。そうした経験がきっかけで民謡へ関心を持った子供は、学校で民謡に触れる際にも比較的受け入れやすいのではないか。」

分析の結果、「両親」と回答した人が最多で53%となった（図表24）。

こうしたことから、家庭という身近な環境で積極的に民謡などに触れている子供は、学校教育で扱われる民謡に比較的馴染みやすいと考えられる。

図表 24：「ジェネレーションギャップを感じた『身近な大人』と、学校の授業や行事での民謡の体験後の興味・関心の高まりの関係」



出典：筆者作成

このことについて、シュタイナー教育の提唱する「第一七年期」及び「第二七年期」に基づいて考察する。第一七年期は身の周りの良いことも悪いことも全て敏感に吸収する時期、第二七年期は美しいものをたくさん吸収し、感情や創造力が育っていく時期とされている。前者は小学校に入学するまでの時期、第二七年期は学校に通う時期、すなわち行事や授業で民謡について触れる可能性のある時期と重なる。図表 24 のグラフにおいて「両親」という回答が最多であったことを踏まえると、身の回りのことを全て敏感に吸収する時期であり、小学校への入学前を含む第一七年期のうちに、家庭で民謡など古い楽曲に触れる機会を多く設け、音楽的感覚を養うことが重要であると言える。それにより、学校に通う時期であり、感情や創造力が育っていく「第二七年期」において学校で民謡に触れることで、さらに音楽的感覚を高める事はもちろん、民謡に対する興味・関心、ひいては地域への誇りの気持ちを強めることに繋がるのである。それは同時に、「学校教育」という枠にとらわれず、学校内、学校外（家庭など）を含めた広い範囲での、民謡に関する教育の場を作ることの重要性も意味する。

4-3. 具体的な施策の提案

先述の通り、シュタイナー教育に基づいて考えれば、身の回りのことを良し悪しに関わらず吸収していく小学校への入学以前の時期に、家庭で楽曲に触れる機会を積極的に設けることが重要となる。しかし、各々の過程でできることには限界があるため、組織・団体・教

育機関などが、より広範囲で地域ゆかりの楽曲を若年層に広めるための施策を行う必要がある。施策を行うに当たり、筆者は以下の3つの点が要点となると考える。

- ① 楽曲そのものだけでなく、地域との繋がりを実感させる工夫を行う。
- ② 民謡などを知る最大のきっかけである学校教育の形を残しつつも、「強制的である」という負の要素を極力排除した、新たな形での体験学習を企画する。
- ③ シュタイナー教育の要素を取り入れる。

まず、①に対応した施策について述べる。2章では、「楽曲とその地域の繋がりを知る機会が少なく、楽曲を聞いてもその曲に関心を持つことに繋がらない」という課題があることについて触れた。この課題を解決するためには、公共交通機関で流れる発着メロディーのように、ただ流すだけではなく楽曲と地域の結びつき、作曲家の生涯といった背景知識を提供する場を設けることが重要である。

そのための方策として、駅内に曲の背景について説明したブースを置く、もしくは車両内のテレビ画面、もしくはアナウンスで曲の背景についての解説を行う、といったもの考える人もいるだろう。しかし現実的には、通学・通勤中であることから、発着メロディーや車両内のテレビ・アナウンスに注意を向ける余裕のない人も多くいることが予想される。

これらの課題を踏まえて筆者が提案するのが、「スマートフォンのアプリと連携した、発着メロディーの情報提供」である。具体的には、公共交通機関の駅に滞在している際に、その駅で使用されている楽曲に関する背景知識を、「通知」という形で知らせる専用のアプリ、をスマートフォンに内蔵する、ものである。スマートフォンは車両内の暇つぶしとして見る人が多く、通勤・通学時のように時間に追われている状態であっても、車両に乗っている時間であれば比較的人々の目に写りやすい。また、通知という形で情報が取得されるという点も有効である。LINEなどのSNSはもちろんのこと、スマートフォン内のアプリを通して通知が入った場合、我々は多くの場合「何かあったのか」と疑問に感じ、情報を確認する。それと同様に、通知を利用することで、人々が曲の背景知識を得るきっかけになりやすくなるのである。

次に、②に対応した施策について提案する。これは決して、学校行事や授業で子供たちに一律に楽曲に触れさせている現状を否定するものではない。前章の図表17のグラフにおいては、「皆で力を合わせて一つのものを作り上げることに魅力を感じたから」という回答、次いで「活動を通して、クラス・学年の仲が深まったから」という回答が上位を占めていた。このことからわかるように学校教育、特に学校行事は楽曲への知識・興味・関心を深めるだけでなく、クラス・学年で一つの芸能を作り上げることで親睦を深め、協力や思いやりの心を育てることにつながる。確かに「強制されている」という側面は否定できないが、こうしたメリットを踏まえると決して無意味なものではなく、寧ろ今後も続けていくべきであると考えられる。その一方で「強制されている」という側面が、一部の子供たちにとっては受け入れがたいものであるのも事実である。学校教育ではこうした負の要素を排除しきりたいな

いことが、子供たちの楽曲への興味・関心へ繋がらない原因になっている。すなわち、学校行事や授業は、子供たちの楽曲への興味・関心を高めるための必要条件であっても、十分条件ではないのである。そのため、行事や授業におけるこれまでの取組みを継続しつつも、これらの負の要素を極力排除できる新たな取組みを行っていく必要がある。

前章では、名目上は「学習」ではない散歩の時間を活用し、事実上理科や社会の学習の時間とする、というトモエ学園の独特のカリキュラムについて触れた。これは、学童期の子供たちの、民謡などへの興味・関心を高めることにおいても大いに参考にできる。具体的には、通常の授業のように「教室」という空間に縛られない教育、という要素を取り入れることができる。この要素を取り入れた教育として、社会科見学や修学旅行などをイメージする人が多いかもしれないが、筆者はこれらの「校外学習」という形態は適切ではないと考える。確かに、社会科見学や修学旅行は教室という空間に縛られないだけでなく、「出掛ける」とそのものの楽しさを感じられる。そのため、座学による授業と比較すれば、子供たちが「強制されている」と感じるケースは少ないといえる。しかし、1年間の授業計画の一環として行われているという点では通常の授業と変わらないため、完全に「強制」という要素をなくすのは難しい。そのため筆者は、以下のようなものを提案する。

1. 野外教育を扱う NPO などの団体が、夏休みなど長期休業期間中に、子供たちが地域ゆかりの楽曲に触れることのできるイベントを企画し、地域の小・中学校経由で紹介する。
2. 学校経由で参加申し込みをした児童・生徒に対しては、参加費の一部を学校が負担するといった対応をとる。

この場合、校外学習とは異なり、学校はイベントを主催する立場ではなく、イベントの紹介・推奨・参加の援助をする立場となる。また、児童・生徒は学校から強制的に参加させられるのではなく、個々人の興味・関心に基づいて参加することができる。しかし、これだけでは「学校生活をきっかけに民謡に触れる」ことのメリットがなくなってしまう。そのため、学校側が子供たちの参加費を一部負担するなどの形で援助する。これにより、学校教育における「強制」という要素の排除と、「学校生活を通してイベントに参加する」ことの恩恵を両立できるのである。

さらに、具体的なイベントの内容についても提案する。

1. 地域に残る民謡碑や作曲家の記念館などを訪問する。

その地域にある民謡碑などをめぐり、指導者が子供たちに対し解説を行う。また、第2章で紹介した作詞家・作曲家の記念館を訪問する。目的は、こうした民謡碑や記念館を訪問することで、地域と楽曲のつながりを子供たちに感じさせ、ひいては楽曲そのものへの興味・関心に繋げるものである。また、トモエ学園の「散歩」の時間からヒントを得た、『「教室」という空間にとらわれない学習』という要素も反映されている。

2. 実際に楽曲の演奏を体験する。

ただし、ただ演奏するだけでは通常の音楽の授業との差別化を図ることができない。そのため、参加している子供たちを複数のグループに分ける。次に、現代音楽で使われている楽器の中から各グループの子供たちが好きな楽器を選ぶ。そして、それらの楽器を使い、グループごとに同じ曲でありながら全く違う演奏を作り上げ、お互いに聞き合う発表会を行う。

これは、学校行事の利点でもある「一つのをチームで作りにあげることで、楽曲への興味・関心、さらに協力や思いやりの心を育てる」という要素を取り入れている。さらに、「Molten Soul Records」の事業、及び前章の図表 21 のグラフに反映されたアンケート結果を踏まえ、「子供たちの自由な発想で、現代風に楽曲をアレンジする」という要素を取り入れた。実際にもアンケートでは「現代風にアレンジした方が興味を持ちやすい」という意見があることから、現代風にアレンジしたものを聞き合うことで子供たちにもより馴染みやすくなることが期待できる。また、こうした演奏活動を行うイベントであれば、野外活動を行う組織・団体だけでなく、「Molten Soul Records」のように、リメイクした民謡を発信する組織・団体が主催で行うことも可能である。一方で、作曲家の意図や感性など、オリジナルの楽曲にしかない要素は、アレンジしたものでは感じられないのも事実である。そのため、まずはオリジナルの楽曲を子供たちに知ってもらい、またオリジナルの楽曲に込められた意図や感性を踏まえた上で、子供たちの独自の解釈・発想によりアレンジしてもらうのが最も効果的であるといえる。また、楽器の演奏に慣れていない子供たちも少なくない。そのため、極力短時間でも習得しやすい楽器を用いる工夫が必要である。またそれらの楽器の演奏技術を教えることのできる人員の確保も課題となる。

このように、「強制」ではなく興味・関心に基づいて自らの意志で参加するイベントは、より子供たちの楽曲への興味・関心を高めることにつながる。また、こうしたイベントで興味・関心を高めることで、学校行事や授業で改めて民謡などの触れる際も意欲的に取り組みやすくなり、「強制されている」という負のイメージも抱きにくくなる。

最後に、③に対応した施策について述べる。先述のシュタイナー教育については、小学校から大学までの6年間・3年間・3年間・4年間という一般的な学校教育と異なる7年周期であることから、それをそのまま取り入れるのは難しいものの、参考にできる要素がある。シュタイナー教育では、オイリュトミーという運動芸術が用いられている。オイリュトミーとは、音楽を形成しているリズムや拍子、言葉の中にある子音や母音を、体を使って表現するものである²⁴。このオイリュトミーの3つの効果として「協調性」「芸術性」「正しい姿勢」の3つが挙げられる²⁵が、今回はその中でも特に「協調性」に着目する。オイリュトミーでは1人で踊るのではなく参加者全員で綺麗に見えるような動きを作るため、周囲とテンポを合わせたり、動きを見たりするようになる²⁶。こうしたことから、「協調性」が身につくとされている。

この「協調性」とは、学校行事や授業で一つの楽曲を完成させる際にも求められる能力である。そのため、オイリュトミーを通して「協調性」を高めることで、行事の際に民謡などに取り組み際にも、子供たちは「皆で一つのものを作り上げる事へのやりがい」という恩恵を強く感じやすくなる。また先述の通り、シュタイナー教育においては、学校に通う時期と重なる「第二七年期」は美しいものをたくさん吸収し、感情や創造力が育っていく時期とされている。そのため、この時期にオイリュトミーを通して音楽的価値を高めていくのは非常に効果的であるといえる。さらに、「第一七年期」は小学校への入学前の時期も含まれることから、子供がこの時期に通う保育園、もしくはリトミック教室での音楽教育で取り入れるのも効果的である。すなわち、シュタイナー教育の要素を一部取り入れることで、子供たちの音楽的感性・協調性を高め、また間接的な形ではあるが楽曲への関心度を高める事に繋がりが得るのである。

ここまで提案してきた施策は、教育機関である学校、自治体、民間企業等様々な組織・団体によって行われるものである。そのため、「地域ゆかりの楽曲を若年層に広める」という目的の達成は、一つの組織・団体に頼らない多面的な取り組みを示唆しているともいえる。

したがって、地域ゆかりの楽曲を若年層に広めることは可能ではあるが、そのためには、以下の3点が重要となると結論付けることができる。

- ① 楽曲そのものだけでなく地域との繋がりを感じさせる。
- ② 学校で児童・生徒に一齐に楽曲に触れさせるだけでなく、この学校教育の「強制」という弱点を克服できる体験活動や、シュタイナー教育のオイリュトミーなど音楽的感性や協調性を高める新たな教育方法を実践する。
- ③ 一つの組織・団体のみならず、官民間問わず様々な立場から取り組みが行われる。

注

-
- 1 「文化はなぜ衰退するのか！？ 伝統を受け継ぐために知っておきたい3つの理由」
<https://takarabune.org/blog/?p=52> (2022年11月30日アクセス)
 - 2 「音楽は好きですか？ | 毎週アンケート | ハピ研 | アサヒグループホールディングス」
<https://www.asahigroup-holdings.com/company/research/hapiken/maian/bn/201202/00409/> (2022年11月30日アクセス)
 - 3 「ご当地ソング-Wikipedia」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%94%E5%BD%93%E5%9C%B0%E3%82%BD%E3%83%B3%E3%82%B0> (2022年11月2日アクセス)
 - 4 「【J-POP】学校の教科書に載ったことがある曲15選！—News-AWA」
<https://news.awa.fm/columns/textbooksong> (2022年10月29日アクセス)
 - 5 「世界に一つだけの花=Wikipedia」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%96%E7%95%8C%E3%81%AB%E4%B8%80%E3%81%A4%E3%81%A0%E3%81%91%E3%81%AE%E8%8A%B1> (2022年12月14日アクセス)

⁶ 「[「勇気 100%-Wikipedia](#)」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8B%87%E6%B0%97100%25>(2022年12月14日アクセス)

⁷ 「[福島市古関裕而記念館](#)」 <https://www.kosekiyuji-kinenkan.jp/> (2022年11月2日アクセス)

⁸ 注7 同書

⁹ 「[古賀政男-Wikipedia](#)」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%A4%E8%B3%80%E6%94%BF%E7%94%B7>
(2022年11月2日アクセス)

¹⁰ 注9 同書

¹¹ 「[明大マンドリン倶楽部について](#)」 <http://mumc.jp/profile/about.html> (2022年11月29日アクセス)

¹² 「[新民謡-Wikipedia](#)」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E6%B0%91%E8%AC%A1> (2022年11月2日アクセス)

¹³ 「日本の伝統文化である民謡を現代に蘇らせ、世界に発信するプロジェクト-CAMPFIRE (キャンプファイヤー)」

<https://camp-fire.jp/projects/view/175435> (2022年6月28日アクセス)

¹⁴ 注13 同書

¹⁵ 「[ハナミズキ \(曲\) -Wikipedia](#)」

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%83%8A%E3%83%9F%E3%82%BA%E3%82%AD_\(%E6%9B%B2\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%83%8A%E3%83%9F%E3%82%BA%E3%82%AD_(%E6%9B%B2)) (2022年12月6日アクセス)

¹⁶ 「[命の別名/糸-Wikipedia](#)」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%91%BD%E3%81%AE%E5%88%A5%E5%90%8D/%E7%B3%B8> (2022年12月6日アクセス)

¹⁷ 「[卒業写真 \(荒井由実の曲\) -Wikipedia](#)」

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%92%E6%A5%AD%E5%86%99%E7%9C%9F_\(%E8%8D%92%E4%BA%95%E7%94%B1%E5%AE%9F%E3%81%AE%E6%9B%B2\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%92%E6%A5%AD%E5%86%99%E7%9C%9F_(%E8%8D%92%E4%BA%95%E7%94%B1%E5%AE%9F%E3%81%AE%E6%9B%B2))

(2022年12月6日アクセス)

¹⁸ 「『トモエ学園』から学ぶ、これからの教育に必要な3つのこと。 | 3歳からのグローバル教育に迷ったら。子どもの生きる力を育む教育専門家 エグゼクティブサポート コンサルティング ベビーシッティング 国際マナー | せかいく」

<https://sekaiku.com/2015/08/21/totto-chan/> (2022年12月21日アクセス)

¹⁹ 注18 同書

²⁰ 「あの有名人も受けていた！シュタイナー教育を徹底解説 | おうちで親子留学」

<https://www.eigofamily.com/archives/2534> (2022年12月21日アクセス)

²¹ 注20同書

²² 注20同書

²³ 注20同書

²⁴ 「シュタイナー学校の必修科目、オイリュトミーを分かりやすく解説！ | cocoiro (ココイロ)」 <https://cocoiro.me/article/60777#i-4> (2023年1月10日アクセス)

²⁵ 注24同書

²⁶ 注24同書

参考文献

「文化はなぜ衰退するのか！？ 伝統を受け継ぐために知っておきたい3つの理由」

<https://takarabune.org/blog/?p=52> (2022年11月30日アクセス)

「文化に関する世論調査」

<https://survey.gov-online.go.jp/h15/h15-bunka/2-5.html> (2022年11月30日アクセス)

「音楽は好きですか？ | 毎週アンケート | ハピ研 | アサヒグループホールディングス」

<https://www.asahigroup->

[holdings.com/company/research/hapiken/maian/bn/201202/00409/](https://www.asahigroup-holdings.com/company/research/hapiken/maian/bn/201202/00409/) (2022年11月30日アクセス)

「ご当地ソング-Wikipedia」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%94%E5%BD%93%E5%9C%B0%E3%82%BD%E3%83%B3%E3%82%B0> (2022年11月2日アクセス)

溝尾良隆 (2011) 『ご当地ソング、風景百年史』 原書房

「【J-POP】学校の教科書に載ったことがある曲15選！ -News-AWA」

<https://news.awa.fm/columns/textbooksong> (2022年10月29日アクセス)

「世界に一つだけの花-Wikipedia」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%96%E7%95%8C%E3%81%AB%E4%B8%80%E3%81%A4%E3%81%A0%E3%81%91%E3%81%AE%E8%8A%B1> (2022年12月14日アクセス)

「勇気100%-Wikipedia」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8B%87%E6%B0%97100%25> (2022年12月14日アクセス)

「福島市古関裕而記念館」 <https://www.kosekiyuji-kinenkan.jp/> (2022年11月2日アクセス)

「古賀政男-Wikipedia」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%A4%E8%B3%80%E6%94%BF%E7%94%B7> (2022年11月2日アクセス)

「明大マンドリン倶楽部について」 <http://mumc.jp/profile/about.html> (2022年11月29日アクセス)

「中山晋平記念館 | 長野県中野市」
<https://www.city.nakano.nagano.jp/categories/shinpei/> (2023年1月25日アクセス)

「新民謡-Wikipedia」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E6%B0%91%E8%AC%A1> (2022年11月2日アクセス)

松永洋介、榎本賢司、久保田香、長谷川智美 (2022) 「地域に伝わる民謡の教材化についての一考察：『飛騨やんさ』の場合」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究・教師教育研究』 第24巻 69-76

山崎瞳 (2005) 「郷土芸能を通じた学校の取組みに関する研究」(2005)『佛教大学大学院紀要』第33号 279-289

「日本の伝統文化である民謡を現代に蘇らせ、世界に発信するプロジェクト-CAMPFIRE (キャンプファイヤー)」
<https://camp-fire.jp/projects/view/175435> (2022年6月28日アクセス)

「ハナミズキ (曲) -Wikipedia」
[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%83%8A%E3%83%9F%E3%82%BA%E3%82%AD_\(%E6%9B%B2\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%83%8A%E3%83%9F%E3%82%BA%E3%82%AD_(%E6%9B%B2)) (2022年12月6日アクセス)

「命の別名/糸-Wikipedia」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%91%BD%E3%81%AE%E5%88%A5%E5%90%8D/%E7%B3%B8> (2022年12月6日アクセス)

「卒業写真 (荒井由実の曲) -Wikipedia」
[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%92%E6%A5%AD%E5%86%99%E7%9C%9F_\(%E8%8D%92%E4%BA%95%E7%94%B1%E5%AE%9F%E3%81%AE%E6%9B%B2\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%92%E6%A5%AD%E5%86%99%E7%9C%9F_(%E8%8D%92%E4%BA%95%E7%94%B1%E5%AE%9F%E3%81%AE%E6%9B%B2)) (2022年12月6日アクセス)

山田玲司 (2007) 『非属の才能』 光文社新書

「『トモエ学園』から学ぶ、これからの教育に必要な3つのこと。 | 3歳からのグローバル教育に迷ったら。子どもの生きる力を育む教育専門家 エグゼクティブサポート コンサルティング ベビーシッティング 国際マナー | せかいく」
<https://sekaiku.com/2015/08/21/totto-chan/> (2022年12月21日アクセス)

「あの有名人も受けていた！シュタイナー教育を徹底解説 | おうちで親子留学」
<https://www.eigofamily.com/archives/2534> (2022年12月21日アクセス)

「シュタイナー学校の必修科目、オイリュトミーを分かりやすく解説！ | cocoiro (ココイロ)」 <https://cocoiro.me/article/60777#i-4> (2023年1月10日アクセス)

研究協力

見える化株式会社 代表取締役 田崎氏

福島市古関裕而記念館

古賀政男記念館 館長 山田氏

大川市役所 インテリア課 海田氏

中山晋平記念館 副館長 青木氏

大洗町商工観光課 商工観光係 関氏